

新任職員研修 実施レポート

日時：令和4年5月11日（水）12日（木） 参加者：85名（うち市町村から61名）

新たに生涯学習・社会教育行政の業務を担当する職員を対象に、新任職員研修をYouTube限定配信により実施しました。「必修！初めに知っておくべき生涯学習・社会教育行政の役割と可能性」をテーマに、参加者は基本的知識や姿勢、社会教育情勢や取組の実際等について学び、目指す方向を見出していました。



【前半 講話】

はじめに当センターの主査（兼）社会教育主事 **皆川 雅仁** が、「開かれ、つながる社会教育の実現に向けて～社会教育関係職員の視点と心構え～」と題し講話しました。まず、平成29年度の社会教育法改正に伴い、地域学校協働活動の機会に関する業務が教育委員会の重要な業務になったことを確認しました。「社会教育」も「学校教育」も「開くこと」「つながる（共有すること）」が必要とされている現状に鑑み、「熟議」を重ねることが諸課題の解決を目指すときに有効な手法であることを説明しました。また、自らの経験に基づく「LRDC（Look-Reform-Do-Connect）」マネジメントサイクルが社会教育の課題解決に有効な手法であることを提案しました。結びには、社会教育関係職員の心構えとして「3原則+1」を提唱し、新任職員へエールを送りました。

【熟議】

- ① 多くの当事者が集まって、
- ② 課題について学習・熟慮し、討議をすることにより、
- ③ 互いの立場や果たすべき役割への理解が深まるとともに、
- ④ 解決策が洗練され、
- ⑤ 個々人が納得して自分の役割を果たすようになるプロセス

【3原則+】

- ① 社会教育主事に“No”はない
- ② 友達の友達は…みな友達だ！
- ③ “こだわりをもたない” こだわり + 自分の立ち位置を知る
(相手の立場に立って)

【後半 講話】

当センターの副主幹（兼）学習事業班長 **柏木 睦** が、「現代的課題への切り込み方～生涯学習センターの取り組み事例から～」と題し講話しました。冒頭、当センターの3機能について説明し、事業を現代的課題である「障害者の生涯学習」「防災」「持続可能な地域づくり」に焦点化して推進していると話しました。障害者の生涯学習推進については、多様な人がいて多様な考え方があることを「バリアフルレストラン」での体験を例に説明しました。その後、昨年度発行した理解促進リーフレットに基づきながら共に学ぶ機会を生み出すための取り組み方を紹介しました。その上で、生涯学習・社会教育関係者には、従来の常識や価値観にとらわれない発想と行動力が必要で、大切なものは何かを考え続ける姿勢が大切であると結び、関係職員が今後業務遂行に向かうベースとなる考え方とモデルを示しました。



【参加者アンケートより】（抜粋）

- ・生涯学習や社会教育の位置づけも理解せずに業務を進めてきたが、関係法令の中身を知ることができ、自分が今任されている業務について理解が深まり、地域のために、まずは自分から動いてみることを大切にしたい。
- ・「ゼロから始めるのは苦しい。何かある、誰かいる。」という話を聞き、すでにある資源を有効活用しつつ、今、そして未来を見据えたときに求められることを俯瞰して考えながら、焦らず誠実に行動していきたい。

第1回 地域学校協働活動推進員・地域連携担当教職員研修（兼）熟議ファシリテーター研修
実施レポート

期日：令和4年6月15日（水） 参加者：62名（うち市町村・県立学校から34名）

地域学校協働活動推進員や地域連携担当教職員等、地域と学校をつなぐ関係者を対象に、「実践演習！熟議をファシリテート！」をテーマに研修を行いました。参加者は熟議体験を通じて、ファシリテートする技術や心得を学び、熟議の必要性や参加者による実践の必要性を認識していました。



【前半 講義】

当センターの主査（兼）社会教育主事 **皆川 雅仁** が「熟議とは」と題し、熟議の概要について、元文部科学省 CS マイスターや当センターでの経験を基に話しました。はじめに、共通認識しておきたいこととして、「コミュニティ・スクール（CS）」「地域学校協働活動」「協働」について取り上げ、熟議とは目標共有や課題解決を目指すときに有効な話し合いの手法であることを説明しました。次に、熟議がCS推進に有効な理由を学校運営協議会の特性を補う面から話し、「熟議はこんなときに開催すると有効性が確認できる」というケースについて

項目立てて紹介しました。結びには、熟議でやらなければいけないこと・やってはいけないことを伝え、運営側として常に参加者目線である必要性を強調しました。

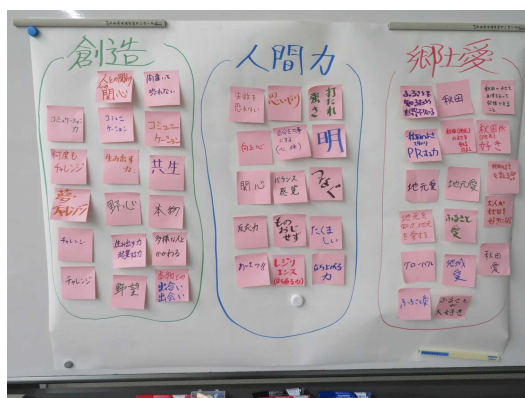


【後半 演習・講習】

研修後半は参加者全員で熟議体験をし、その後、講義「ファシリテーターに必要なスキルとは」を受講しました。講師は当センターの副主幹（兼）学習事業班長 **柏木 睦** です。冒頭、ファシリテーターの5つの役割をおさえました。そして、その役割を自らがファシリテーターのモデルとなって熟議を進めました。参加者が「秋田県の子どもたちにどのように育ててほしいか」というテーマについて、自分に何ができるのかを考えられるように、「本県学校教育が目指すもの」「家族との会話・わが子との会話時間」のスライドを提示して、レディネスを揃えることの重要性を示しました。

参加者はアイスブレイクの後、ラウンド毎に、席替えをしながらテーマに沿って話し合いました。付箋に書いた自分の考えを示して話したり、付箋を仲間分けしたりと活発に話し合う姿が見られました。左の画像は、最終ラウンドの付箋をまとめたもので「創造」「人間力」「郷土愛」が共通点として浮かび上がりました。

熟議体験後は、講師から、示したスライドの意味や、進行する上での心得や手順等の説明がありました。中でも、ファシリテーターを務めるに当たり特に意識してほしい点として、レディネスを揃えるときにどのような資料を提示するのかに注力すること、熟議は参加者に自分ごととして意識してもらうことが大切なのであって、書かせること・強引にまとめようとするのはさせないことを強調しました。最後に、熟議のポイントを伝えまとめました。熟議体験を通じての講義は、実感を伴った理解に結び付いたようで、参加者全員から「大いに満足・満足」の高評価をいただきました。



- 1 何のために話し合うのか明確にする
- 2 話しやすい雰囲気を作る
- 3 新しい気付きやアイデアを生み出す
- 4 目標を共有する
- 5 時間を適切に管理する

【参加者アンケートより】（抜粋）

- ・昨年度のオンライン熟議研修と併せ、実際に熟議を体験したことで、ファシリテーター側、参加者側、両方の視点から熟議について理解を深めることができ、大変勉強になった。
- ・教職員には、まずは熟議の必要性を訴えることから始めたいと思った。理解を得るために、熟議について、研修等で伝える機会を作ればと思った。

第1回市町村職員等専門研修 実施レポート

日時：令和4年7月20日（水）10:00～15:00 参加者：26名（うち市町村から10名）

社会教育行政を業務とする市町村関係職員を対象に、「障害者の生涯学習の実践方法と情報発信について学ぼう」をテーマに研修を行いました。参加者は、Web会議関係機材に実際に触れたり、センターで実施した障害者の生涯学習講座の環境を見たりすることを通して、各地域での業務や企画に結び付けられそうなアイデアを生み出していました。



【前半 講話・演習】

県教育庁生涯学習課の社会教育主事 **進藤 尊信** 氏が、「Web会議関係機材があると、どんなことがどこまでできるのか？～主に市町村の立場から～」と題して講話をしました。まず、職場に備わっている機材を尋ねた事前アンケートの結果を発表しました。ポータブルスピーカーやプロジェクター等の音響・映像関係機器は備わっている所が多く、逆にキャプチャーボード（外部の映像・音声をパソコンに取り込むための機材）等の動画編集の質が向上する機器は備わっていないという状況でした。そこで、Web会議に関わる上での基本的な機材の接続方法や、キャプチャーボードの有無によってそれぞれできることについて、操作の難易度順に説明していきました。特に参加者の興味を引いていたのが、「ワイヤレスアンプーキャプチャーボードーパソコン」の接続方法です。これにより、オンライン型と対面型を併用した研修を会場外で受講した場合に、会場内の声が会場で聞くのと大差なくはっきり聞き取れるという効果を知ることができました。機材を生かすために必要な知識・技術を知る機会となった研修でした。

【後半 講話・協議】

当センターの社会教育主事 **栗田 寿** が「地域で、共に学ぶ機会をつくるために～リーフレットを活用した「障害者の生涯学習」推進～」と題して講話をしました。冒頭では、国や県の障害者の生涯学習に関する動向と、当センターでの取組を紹介しました。「『必要感』『体験』『話し合い』+『楽しさ、共に』」をコンセプトに、できることをひとつずつ行っている経緯を伝えました。その後、参加者は自分の携わる業務や経験を基に、「たたきだいシート」を用いて障害者の生涯学習講座を企画しました。当センターの実践レポートを参考にしたり、簡易ボッチャコートでボッチャ体験をしたりしながら企画検討をし、企画した案を発表し合いました。「公民館でのお泊まりキャンプ」「障害者と高齢者が一緒に行くスマホ教室」等、魅力ある企画案がたくさん出されていました。中には具体的に合理的配慮が記載され、すぐに実施できそうなものもありました。結びには、合理的配慮について、講師の特別支援学校での経験から熱い思いが語られ、参加者は大きく頷きながら聞き入っていました。



【参加者アンケートより】（抜粋）

- ・情報発信ツールは始めから苦手と思っていたが、出力入力、やりたいことがわかれば難しいことはないと感じた。これからうまく活用していくことが求められると思うので、大いに役立つ研修だった。
- ・障害者の生涯学習についての講話はとても聞きやすく、これまでどのように取り組んできたか、また、これからどのように取り組んでいけばよいかがよく分かった。

第1回公民館等職員専門研修 実施レポート

日時：令和4年9月7日（水）10：00～15：00 参加者：30名（うち市町村から12名）

公民館等、社会教育施設で業務をする職員を対象に、「公民館が地域のためにできること～防災・情報格差の縮小～」をテーマに研修を行いました。参加者は、各公民館等での講座に生かそうと、Web会議関係機材の活用方法や、「新しい防災+α」の考え方・暮らし方について積極的に学んでいました。



【前半 講話・演習】

県教育庁生涯学習課の社会教育主事 **進藤 尊信** 氏が、「公民館にある機材を利用してできる、Web会議等を利用した実践的な情報発信について」と題して講話をしました。初めに、職場に備わっている機材を尋ねた事前アンケートの結果から、公民館等は主管課に比べWeb会議に必要な機材の所有割合が低いことが明らかになったと伝えました。

そこで、Web会議の利点と欠点、Web会議だからこそできること、公民館の立場でできることを挙げ、各公民館の状況に応じたマニュアルを作成することを勧めました。また、第1回市町村職員専門研修と同様、基本的な機材の接続方法や、キャプチャーボードの有無によってそれぞれできることを取り上げました。現在当センターで活用しているマニュアルは講師が作成したものです。各地域の参考となるように講義資料として配付しましたが、データとして受け取りたいと希望する参加者もいるほど高い関心が寄せられていました。

【後半 講話・演習】

日本赤十字秋田短期大学講師の **及川 真一** 氏が「ローリングストックやフェーズフリーについて」と題して講話をしました。冒頭、防災対策をしていない人が約半数いる事実を伝え、その心理には「正常性バイアス」自分は大丈夫と思いつつ脳が働いていることを説明しました。これは逃げ遅れの原因にもなっているそうです。そこで、正常性バイアスを解除できるのは訓練であり、防災を非日常にしない「フェーズフリー」という新しい概念があることを話しました。日常的に防災を意識する一つとして、備蓄と消費を繰り返すローリングストックがあります。非常食を普段から食することによって、ゴミ処理の簡便化や栄養バランス等の気付きが生まれて、家族や自分が非常時でも満足できるような選択につながると教えてくださいました。他にも、事例を交えながら住民参加型の防災講座を紹介し、防災を学ぶことが簡単で楽しいイメージに変わるようにしたいとまとめました。講義後半では「水のう」づくりをしました。45リットルのポリ袋を二重にして、水を入れて結びます。それを段ボール箱に入れると簡単な水防の役目を果たすそうです。また、おむつと同じような吸水機能をもつ「水のう」も市販されていることを知りました。記録的大雨の被害に遭った参加者は、今あるものを活用し凌いでいく重要性を理解していました。



【参加者アンケートより】（抜粋）

- ・情報発信は今後強く求められる手段で、具体的に話を聞くことができよかったです。備わっている機材でどのくらいできるのか戻ったら試してみたい。
- ・フェーズフリーの考え方は、これからの防災の基軸となるものであり、公民館等の講座等を通じて、市民に広く浸透させたいと思う。公民館の防災教育をアップデートするよいきっかけとなった。

第2回市町村職員専門研修（兼）第2回公民館等職員専門研修 実施レポート

日時：令和4年10月26日（水）10：00～15：30 参加者：29名（うち市町村から13名）

昨年度に引き続き、「障害者の生涯学習×公民館の防災」と現代的課題を組み合わせたテーマを掲げて研修を行いました。参加者は、高齢者や障害者の疑似体験キットを使い、行動の困難さやサポートの温かみなどを体感し、障害の有無に関わらず、共に学ぶ場づくりが必要だと感想を共有していました。



【前半 講話・体験活動】

当センターの社会教育主事 **栗田 寿** が「障害者スポーツ×疑似体験～体感が教えてくれるもの～」と題して講義をしました。冒頭、なぜ今障害者の生涯学習が求められるのかを、本県の障害者の生涯学習支援モデル事業等を取り上げて説明しました。事業の推進においては、障害者スポーツスペースの開設やボッチャ交流大会の新設等を通じて、「『連携・モデル・プロセス』が重要であり、様々な方の『声』を大切にして、障害の有無に関わらず楽しむ『場』をつくるのが大事であることが分かってきた」と強調しました。例えば、今年度、当事者やさまざまな人が話し合う場で、保護者の「人と出会える機会や場があれば」という声から、県内企業と特別支援学校が連携し、スポーツイベントを実施した事例を紹介しました。他にも、現在仙北市と協働して、障害者の生涯学習プログラム開発を行っている取組を紹介し、障害のある方が安心感をもつことができる場で交流すると、自然な形で相互理解が進むと述べました。そこで、参加者も実際に気持ちに触れられるよう、疑似体験キットを装着しながら障害者スポーツに挑戦しました。ボッチャや卓球バレーの楽しさを共に味わい、「この思いを地域で形にしたい」と伝え合っていた参加者の声には力強さが感じられました。

【後半 講話・体験活動】

日本赤十字秋田短期大学講師の **及川 真一** 氏が「疑似体験を通じて、避難行動要支援者の避難行動支援を学ぶ」と題して講義をしました。及川氏は第一声「経験は裏切らない。経験からどう支援したらよいか想像が生まれる」と切り出し、和やかな会場の雰囲気緊張感をもたせました。その上で、災害時に避難行動要支援者が多く犠牲になっているケースが増えているという現実を伝え、市町村に対して避難行動要支援者ごとの個別避難計画作成が努力義務化されていることを話しました。自治体によっては、広域避難のための訓練やウォークラリーを兼ねた訓練を行っているそうです。そこで、高齢者の歩行速度の特徴等を体感できるよう、参加者は疑似体験キットを装着して、ペアやグループで次の行動とその支援を体験しました。＜①椅子から立ち上がる一座る体験 ②車椅子操作方法 ③杖歩行、階段昇降 ④寝ていて動けない人を毛布等を使って運ぶ支援＞どの支援も、最小限の力で介護ができる介護技術「ボディメカニクス」が基本であるそうです。この体験を通じて参加者は、冒頭に及川氏が伝えた言葉の重要性を実感していたようでした。



【参加者アンケートより】（抜粋）

- ・以前福祉関係の部署にいた事があり、どう接するか研修よりも実際に関わってみる（自然に交流する）という点にとてもうなずいた。公民館等で企画していきたい。
- ・公民館職員や各講座を活用している地域住民が障害のある方に対する合理的配慮を足並みをそろえて行える環境を設定する必要がある。その為には学校や職場と情報交換をし、その情報を受講者にも伝えて、共通理解を図っていくことが重要だ。

令和4年度 秋田県生涯学習・社会教育研究大会 報告

日時：令和4年11月11日（金）10：30～15：00

会場：秋田県生涯学習センター／ライブ配信（Zoom）の視聴可能な場所

参加者：生涯学習・社会教育主管課職員、公民館・市民センター等の社会教育関係施設職員、社会教育委員、公民館運営審議会委員、生涯学習奨励員、家庭教育支援関係者、学校教育関係者、社会教育士、社会教育主事有資格者等 137名（うち来所者65名、配信視聴者72名）

テーマ 持続可能な地域づくりに向けて～ゆるやかなネットワークによる社会教育の充実～

- 社会的課題への対応、関係者に求められる役割、資質
- 協働体制の実質化、つながりを担う人材の育成

【基調講演】「社会教育関係者には、今何が期待されているのか」文教大学人間科学部 教授 金藤ふゆ子 氏



金藤氏は冒頭で「学びを通じた地域づくり・人づくり・つながりづくり」は多くの省庁が取り組んでいる政策であり、人口減少時代の新しい地域づくりにおいて、社会教育を基盤とした、人づくり・つながりづくり・地域づくりに取り組み、学びと活動の好循環を生み出していくことが重要であると話されました。さらに、社会の各分野で社会教育主事有資格者が活躍することで、社会全体の学習の充実と質の向上に繋がると加えました。その後、地域はいかに多様な組織・団体に構成されているかが分かる活動概念図を示しながら、地域づくりには、人づくり、つながりづくりに注力することが必要で、特に、地域と学校をつなぐ関係者には、助けを求めたり受け入れたりする力

（求援力と受援力）や自らが主体的に行動する力が大切であることなどを、自身の経験や東京都の学校支援機構を例に紹介されました。結びには、本県オーダーメイド型社会教育主事派遣事業や各県の社会教育委員の活動を取り上げ、地域の学びを通じた多様な主体との連携・協働、学び合い・支え合いは、必ず地域全体を活性化するとまとめました。

【実践紹介】

①「熟議で深まる地域のきずな」

鹿角市教育委員会生涯学習課社会教育班

主査 赤坂 勲 氏

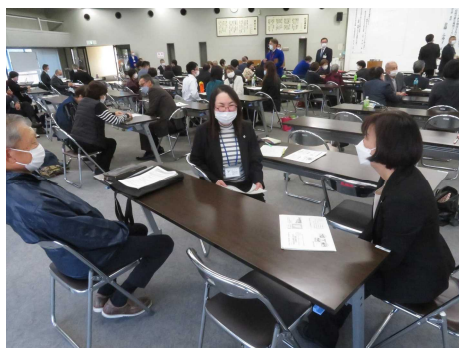
- ・地域課題の洗い出しとオーダーメイド型社会教育主事派遣事業活用の経緯
- ・人材、ファシリテーター育成の実際
- ・生徒も熟議に参加。事業の作用と熟議の効果

②「共生社会実現に向けた公民館の取組」

仙北市教育委員会中央公民館

社会教育専門官 佐々木 幸美 氏

- ・大曲支援学校「せんぼく校」や指定障がい福祉サービス事業所「愛仙」とのかかわり
- ・各所との連携・協働。地域ネットワークの構成
- ・物理的なバリアフリーと心のバリアフリー



【参加者アンケートより】（抜粋）

- ・CSの状況や地域比較・事例等最近の動向を知ることができた。県内にいながらほぼ知らない取組もあり、自分のアンテナを積極的に広げていく必要性を感じた。
- ・ファシリテーターを育てることは大変な事だと感じた。個々の考え方・感じ方を緩やかにまとめることは時間がかかるけれど、大切な事だと思う。
- ・持続可能な活動をしていくために、学校と地域の連携・協働は不可欠。福祉サービスとの連携はすばらしい試みだと思った。